

学生相談室によせられる就職をめぐる悩み

就職の悩みとは

就職活動を前にしたこれからの時期の学生相談室には、将来の進路選択について相談に来る人が多くなる傾向があります。1、2年生では「自分の本当にやりたいこと、今のうちから探したいんですけど、そういうのってどうしたらいいですか」とまだまだ曖昧な相談ですが、実際に就職活動をする3、4年生は「就職するか大学院に行くか迷ってるんです」「地元に戻るか東京で頑張るか、どうしようかなって悩みどころです」「私あがり症なんですけど、就職活動始まって大丈夫かなって心配」とより具体的な相談になります。またこの時期には「ほんとに厳しいですよ。もうだめだめ。泣き入ってます」と言いながら就職活動を続ける4年生や大学院生がいるのです。このようなさまざまな相談は、学生にとっていかに就職が大きな人生の出来事であるかを示唆します。

悩みの背景：期待と価値観

就職はもろろん誰にとっても大きな出来事ですので、時には大きな心理的負担となつて学生を追い詰めてしまうことがあります。厳しい現実に対して過剰に繰り返される「ちゃんと就職しなさい」という周囲の期待と、厳しい現実にも関わらず強固に主張される「自分のやりたい仕事でなくてはならない」という価値観が一つの要因です。周囲の期待は、「ちゃんと就職しなさいよ」と直接間接に言われる場合もあれば、そう言われるまでもなく「大学まで行って就職できないのは親に申し訳ない」「いままでたくさんお金を出してもらったんだからこれ以上迷惑かける訳にはいかない」という形で自分でも気づかないうちに内面化されている場合もあります。一方、「自分

のやりたい仕事でなくてはい」という価値観は、自分のやりたい仕事のイメージが具体的に明確だから譲れない場合と、本当にやりたいことがまだ見つかっていないからどこかにあるはずだ、と思いついて理想のイメージにこだわってしまう場合があります。いずれの場合にも、厳しい現実とそれに折り合わない過剰な期待や価値観とのギャップが大きな葛藤を生んでしまうのです。

現実と折り合う柔軟さ

このような葛藤の解消方法のひとつとして、時には、現実との折り合いをつけるように自分のものの見方や考え方を変えることが必要になります。どうしても変えられない現実に対しても、柔軟な考え方なるべく楽にやってみようということです。たとえば「知名度の高い企業じゃなくてもまあいいよ」「どうしても公務員じゃなくてもいいか」「理想にぴつたりの仕事じゃないけど、やってみたら面白い所も見えてくるかな」「もし就職が無理でも、その分役に立つ資格を取る時間にしよう」等、自分のものの見方を変えるのは簡単なことではありませんが、その経験が後の社会人生活でさまざまな困難に出会った時に役立ちます。考えをより柔軟に、視野をより広くもつことが大切なのです。

(板倉キャンパス学生相談員 松平 友見)



学生相談室(板倉キャンパス)

禁煙者からのメッセージ

平成14年度の東洋大学報181号(「健康日本21」と「たばこ」)・182号(もっと知ってほしいたばこの害)・183号・184号(禁煙のすすめ)と、たばこについて連載してきた中で、学生からの反響はもとより、教職員の方々からのうれしい応援を多数いただきました。その中から、特に感動したある先生の手記を、禁煙応援メッセージとして紹介させていただきます。

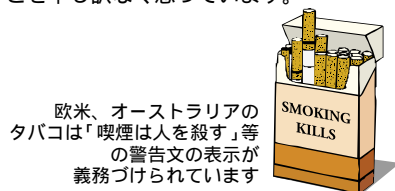
..... 煙草との出会いと別れ

紫煙をくゆらすきっかけは誰も単純なものです。私の場合は、小学校の5年生だったと記憶しているので、かなりの不良少年だったこととなります。終戦がその前の年で、価値観が一変し、さらに生活環境も変わり、将来は医者になる筈であったのに、「教員になって、休暇中は勉強ではなく、百姓仕事をして食料だけは確保しろ」というのですから、少しばかり学業成績の良かった少年は、希望を失い、墮落への道を歩きました。その手始めが「煙草」であった訳です。当時は煙草も不足がちでしたが、祖父が買っていた「光」という両切りの紙巻煙草が茶筆筒に入れてあるのを知っていました。これをこっそり1個持ち出して1本吸ったところで、すぐ見つかりました。箱の数が数えてあったようです。元警視庁勤務

の祖父のお叱りは大変なものでした。しかし、煙草確保に成功した友達もいたので、時々これを吸って大人の気分を満喫していました。当時は煙草が健康に良くないということは、今ほど知られていなかったので、窃盗の罪だけが咎められました。

爾来、煙草との縁が切れずに数十年が過ぎました。「健康のため、吸い過ぎに注意しましょう」という程度の緩やかなお言葉では、一度身についた悪癖は取り払えません。外国では、煙草の害が報じられ、市の条例で禁止を打ち出したところもありましたが、まだ、日本は喫煙者に甘いという感じが強くなります。アイルランド政府は、早くから「Cigarettes can seriously damage your health」という表示を出していましたが、1977年に

“Smokers die younger”という強い警告に換えました。そのためか、私の意志の弱さが知りませんが、私が煙草を止めたのは8年ほど前のことです。それも自発的な意志によるのではなく、胆嚢癌の疑いで手術を受けた病院の院長の強い禁止命令からでした。「煙草と別れた」というよりは、寧ろ、「煙草と離縁させられた」と訳です。私は今になって、初めて、私の喫煙が周りの人に多大な迷惑をかけたことを申し訳なく思っています。



欧米、オーストラリアのタバコは「喫煙は人を殺す」等の警告文の表示が義務づけられています

(白山キャンパス医務室)